

近代中国における商業地区の形成過程に関する基礎的研究 : 北京王府井地区を対象として

于, 小川

<https://doi.org/10.15017/1398260>

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2002, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



第二章 近代以前北京の既存商業地区

2-1 北京の歴史及び都市構成

現在の北京市は中国の首都であり、太行山脈と燕山山脈、そしてなだらかに渤海湾にいたる扇状地の華北平原の接点に位置する都市である。

北京は人類文明の発祥地である。50万年前の人類、北京原人と5万年前に生存していた山頂人の遺跡が発見された。周代（紀元前100年）にあつてはこの地方に割拠した燕の都薊である。後漢時代（紀元25-220年）と唐代（紀元618-907年）は幽州ともよばれたが、唐末に至るまで華北大平原北端の軍事・交通の要衝としての位置に変化はなかった^(注1)。

しかし10世紀の前半になって、西遼河の上流、シラ・ムレン川流域から起こった契丹族に占拠され、その王朝遼（紀元947-1125年）の副都となつて、南京または燕京とよばれたが、12世紀はじめ、女真族が南下し遼を攻略、その王朝金（紀元1115-1234年）の首都となり、その名は「中都」と改められた。「中都」の形は東西に少し長い方形で、各面に三つ門があり、中軸線はやや西側にかたよつていた。このようにして、北京は東北少数民族の漢地支配の根拠地となつた^(注2)。

紀元1215年チンギスハンは蒙古軍を率い、金を攻略し、紀元1263年チンギスハンの孫フビライは中都の東北に7年がかりで新城を建設した。元（紀元1271-1363年）の大都である。1267年から城郭と宮殿を建設し始めた。これは今日の北京城の前身で、史上名高い大都である。大都の建設は都市計画において、全面的な計画設計に従つて建設したもので、都市設計においては初めて中国の国都营造の理想を具体的な地理条件と結びつけ、『周礼・考工記』中に述べられた王城の形のように（図2-1）^(注3)、金王朝の離宮大寧宮を中心としたもので、周辺の湖沼、すなわち現在の北海、中海を太液池と称し、万寿山、すなわち瓊華島を築いた。そして太液池の東岸に皇帝の宮殿を営んで大内とよび、西岸には皇太子と皇太后のため興福宮と隆福宮を設け、その一本の南北中軸線を選定した。また積水潭を南の城壁の定位根拠とし、ほぼ正方形であり、城壁の周長は28600メートルで、面積は50平方キロである。城門は11である。全体的に元大都は左右対称の整然とした城を構えた^(注4)。

朱元璋が明（紀元1368-1644年）を建てると、大都は北平と改称され、元の大都を基礎とした改築と増築を加えた。その後、1403年に朱棣が既位して北平を北京と改め、国都として、同時に元大都の北部の荒涼な場所を放棄し、北の城壁を南へ2.5キロ縮めるとともに南側を拡張し、大都の南城壁を南へ1キロ伸ばした。また内城を成立し、皇城（紫禁城）が新設された。さらに元大都の水系を継承しながら、新たな人工湖の南海を造つた。

永楽18年（紀元1420年）城の南の中軸線の両側に天地壇と先農壇を建設し、中軸線を大きく伸ばした。また同年、中軸線の北端に鐘鼓楼を建て、長さ8キロの南北中軸線の計画の基礎を築き、封建的国家を象徴する中心軸を強化した。この鐘鼓楼の建設も元大都の伝統を継承し、計画的につくられた元の大都の基盤目状の骨格を受け継いだものである^(注5)。また、1564年には、内城の外に拡大した市街地を囲い込み、さらに、防備を強化するために外城の建設に着手した。当初、城内全体を囲む予定であったが、財力不足のために都市の南側だけにとどまり、現在の北京の特色である凸型の輪郭が形成され、北京の都市空間は内城と外城からなり、内城の中には、中央に皇城、その内部に宮城の城壁があり、全体として三重の城壁が入れ子状に巡る形をとった。元代以降の自然発生的な道路を取り込んだ外城は、南北の中心軸を除いて規則的な道路骨格を持たないものであり、道路のシステムは計画性が欠け、不規則な道路が多い^(注6)。

清国（紀元1616—1911年）は1644年の清軍の北京への入関後、都城の形態に基本的な改変を加えることなく、ただ数多くの建物を再建し、明時代の北京城をそのまま継承した。都市改造において、ほとんど新規計画が認められず、建築物を中心にして見れば、宮城と京城との輪郭は明代と清代とは同一に近く、清代は顕著な変化が見られなかった。また道路のシステムはほとんど旧来の基礎のうえに発展したので、変化のあまりない、互いに直交する方形の道路網であった。ただ著しく異なるのは、清の建設は北京の西郊を中心として経済的・物的力を大規模な皇家園林整備に投入した^(注7)。

以上のように、元、明、清各時代において、中華帝国都城として、北京の都市構造は伝統的な宗法・礼制の思想を体現し、都市建築物の配置手法は「朝を面にし、市を後ろにす」といった計画的に整然として統一された。また各時代の都市構造は前時代のものを継承しながら、発展していた特徴が見られる。また明・清時代は紫禁城が都市の中央にあって、事実上は宮殿が都市を東西二つ部分に区分していたことが、結果的に都市の南北方向の道路幅員を広くさせ、東西方向の幅員が狭い道路が多く存在したことになり、都市交通に著しい不便をもたらした。これは、封建社会の都城配置において貫徹された支配階級の設計意図と皇帝至上の権威を際立たせた思想を明確に表している。

2-3 近代以前の既存商業地区

北京は国都として十分に皇帝とその政権の需要を満たすほか、都市市民の生産、生活を考慮にいれた機能構成が現れた。すなわち、商業地区は市の各地区に分布しており、例えば明・清時代において、主に外城の前門地区、内城の鼓楼地区は商品の集中する主要な供給地となっていた。また交通幹線道路に位置する西単大街、宗教施設の縁日から発生した廟会である東四地区の隆福寺廟会のところには、これにつぐ商業地区があった（図2-2）。このようにして各地区の住民の生活物資供給の問題は解決されていた。ここでは、北京商業地に関する既往研究を踏まえ^(註8)、近代以前北京の既存商業地区の特徴を解明する。

2-3-1 鼓楼地区

鼓楼の場所は、元が金を滅亡した後、金の中都城の東北に建てた都城の中心である。中国の都城建築規格により、「左祖右社、前庭後市」つまり、「左はおたまや、右は神社、前は庁舎、後ろは商売市場」ということで、元の時代の鼓楼前の斜町の市場は、ちょうど元の大都宮城の後ろにある。これは都城総体配置の一部である。「元史」によれば、「斜町の市場は日中坊のところで、日中を市場の名前に命名した。」とある。この市場は政府が設置したので、商販が集まり、この市場を盛んにする意図があった。しかも都城が建てられてから、元の貴族たちの家がほとんど都城の中心及びやや西の方に建てられる。その時、鼓楼のまわりには米の市、薪の市、鉄器の市、帽子の市、絹の市があった^(註9)。

鼓楼前の商売町が栄えた別の原因としては、当時の城内で有名な積水潭港に近いことがあげられる。鼓楼前に商業で栄えた町の成立は、元時代までに遡る。当時、宮城の北には、積水潭史料『日下旧京考』によれば、「北京の青龍水は白河であり、密雲を南に流れ通州城に至る。白虎水は玉河であり、玉泉山から出て、宮中を経て市街地を流れ通惠河に注ぎ、白河に合流する。朱雀水は廬溝河であり、桑乾河から宛平県に入り、廬溝橋へ。元武水は、高粱河などであり、北京の北を巻くようにして流れ、北の白河と合流する」との記録が見られる。つまり北京は、風水の理論を直接に応用して、特に水路の配置が重視された^(註10)。当時中国随一の穀倉地帯といえは揚子江下流の南岸、いわば江南地方であった。大都の糧食供給はすべて江南地方から運ばれていた。

その時に食料は主に海運によって、沽河口を通り、沽河口を経て通州まで運ばれた。しかし、通州と大都の間は運河がないことから、大量の食料を大都に陸上で運送しなければならなかった。このため、元時代の郭守敬が以下の献策を皇帝にあげた。「北山の白浮泉の水を引き出して西折り南へ、瓮山泊を経て、南水門から城に入れ積水潭に集まり、つづい

て、東折り南へ、都城南水門か食料を運ぶのために、都城南水門から出て、もとの運糧河に入る」という方法である。元世祖がこの意見を受け入れ、1292年、通州から大都城内までの通惠河の工事を完成した。これは通州から南へ大都城内の皇城東の「南北河沿」を経て、次に後門橋を経て積水潭に着く。ここに入ると、岸辺に設けられた埠頭に船を横付けし、そこで物資が荷揚げされる。この一帯は元大都の中心商業地区であった。

元代以後、玉泉山と白浮泉から引き出した水が段々少なくなって、積水潭の面積も次々に小さくなり、通惠河の水量も減少となり、そこで運送船が積水潭まで行くことは出来なくなった。このため明代に、北方の城壁を南に移して、鼓楼は徳勝門と安定門の間の良い場所にあった。しかも、ここは明清宮城の後ろにあり、皇城の必要品は地安門を出て、鼓楼前の町にて買えることが多かった。特に、清に入ると、積水潭のまわりは、満州族の住宅地となり、近くに住む貴族たちが遊びに来る機会が多く、これが要因となって鼓楼町で商業が盛んになった^(註11)。

以上のように、運輸手段において、最も重要な役割を果たした水運の発展より、北京市内の鼓楼において、商業空間が形成された。

2-3-2 東四地区

定期市は都市・農村を問わず、人々の生活に密着してすこぶる重要な意味を持っていた。定期市は県城などの地方都市や、郷村の集落ではもちろんのこと、国都においてさえ開かれていたのである。普通それらは単に集・市ともいい、寺廟の行事と結びつくと、廟市、廟会と呼ばれる。

北京においては、内城と外城において、多くの定期市や廟会が存在していた(表2-1)の隆福寺廟会が一番盛大である。清の典籍『藤陰雜記』によれば、「廟会のうちに、ただ東城の隆福寺と西城の護国寺には、様々な商品が揃っており、目が迷うようになる。王公達も歩いて遊びに来る」とあり北京市内でも特に進んだ文化地域で、商業もきわめて盛んであった。そこで扱われる商品も高級で購買者層の質も高ったが、一方周辺部では城内や近郊の零細な手工業の製品が、購買力の低い需要者を相手に廟会で販売されていた^(註12)。以上から北京で近代的工業はもちろんのこと商業も未発達で、北京城内には多数の零細な手工業者がいて、零細資本の廟会商人を媒介とし、あるいはみずから廟会に店を出して製品を販売していたことが分かる。購買者の方もまた同様に生活力の低い人々であって、かつ北京城内は相当に広いため交通費のかかる遠い商店街まで出かけることなく、近くに廟会のある日を待って日用品を求め、あるいは一時の娯楽に興じていた。つまり、供給者も需要者も同様な条件のもとに、廟会という場を共通に利用していたといえる。隆福寺は1901

年に火災にあってからその後は伽藍は再建されず、全く廃墟と化していたが廟会の当日ともなれば、平均一千軒近くの露店が境内を埋め、付近の路上や隙地にあふれ、一キロあるいはそれ以上にもわたって露店街が続いた^(註13)。

また、明清の時代は、杭州から浙江省、江蘇省、安徽省を經由して北京に至る運河が北京の生命線であり、政府は南各地の民衆から納めた食糧を運河によって次々に北京まで運送して、かつ中国南地方に生産された商品という「南貨」及び「洋貨」という外国物も食糧を運送する船で北京に運送した。ある時、運送船が遅れたとき、北京の物価段が次々にあがることがあった。通州は、その時に北京の重要な食糧と貨物の集積地となった。水上で運送した物、或は陸で運送して来た物でも、通州を經由して北京へ転送された食糧と貨物は、朝陽門を通過して城内に入り、そして近いところにあった倉庫に入れられる。その時に、北京の東から来た運搬と商売の人たちがこの朝陽門と東四牌樓の間の町側にある店で食事とった。これが、多くの商業施設の集積となった^(註14)。以上述べたことが、東四商業地区の成立原因であると考えられる。

2-3-3 西単地区

西単地区で商業が栄えた原因は、主に二つある。まず、当地は北京西南方の廣安門へ行く道の中心であること。すなわち、西単地区から南へ宣武門を出て菜市口にて右に折れ廣安門に至る。昔は北京に陸路で行くのは西南へ、水路でいくのは東南へといわれた。この西南は、すなわち廣安門を出て南へ廬溝橋に至る。この古い橋は北京より三十里のところである。その時、ここまで来るとほぼ真昼になり、やや遅く出発すると、ここ至る時は夕方になるため、旅行者はたいてい西単地区に泊まり、そして南へ良郷を經由して涿州に至り、ここで三の方向に分けて、東南の方は山東省、江蘇省、浙江省と廣西省へ、西南の方は、山西省、陝西省へ行き、南の方は雲南、貴州省などへ行く。そのように、西南各省から陸路で来る商人と旅行者及び貨物はこの路線を沿って北京に入って来た。

もう一つの原因は、明清時代に、内城の南の区域に多くの役所位置していたことである。例えば、大理寺（最高裁判省）、刑部（法務省）、都察院（最高検察院）、鑾儀衛（宮内庁）、翰林院（科学技術庁）などがある。これらの役所で必要をされる品物は、主に西単地区で買い入れられていた^(註15)。

2-3-4 前門地区

元代の前門地区は、住んでいる人が非常に多く、繁華な麗正門外の市場地域であった。十六世紀、明代中期の外城の建設は、城壁が南へ移ったため、その後の北京の都市空間を

大きく変えることになり、麗正門内外の地域の商業は衰退してしまった。

紀元1416年、明の永楽帝は北京を国都とし、同時に大都のやや南よりに北京城を新築した。明の統治者は正陽門と承天門の間に、多くの官庁を設置したので。地方から訪ねて来る官僚は正陽門の付近に泊ることとなり、外城の軸である前門大街は内城と外城を繋ぐ幹線道路となった。これより、城外の商業地区が再び栄えてきた。

紀元1553年には、城内の住民を収容しきれなくなり、城外に住みついた零細の手工業や商人を取り囲むようにして外城が築かれた。満州族支配の清代に入ると、実権を握った満族貴族による漢族の迫害、つまり土地や家屋の占拠によって、外城は庶民文化があらゆる人々に開放され、新しい場としての役割を担った。内城は満族を中心とした官吏が多く占め、それ以外の漢族を中心とした商人などが外城に追いやられる形となり、商業活動、文化、遊興もこちら側へ移動した^(注16)。

18世紀初めの雍正年間から、漢族に対する障害が取り除かれると、外城に特徴的な都市施設である同じ職業の人々で組織される同業会館が多く建設されるようになった。さらに、自治や娯楽だけではなく、地方の商人や科挙の試験に臨む学生などの宿泊所となり、北京に住む同じ出身の人々にとっての拠点となる同郷会館が軒を連ねるようになった^(注17)。

また、内城にあった劇場や遊郭もこちらに移転させられたため、会館、酒樓、茶館、料亭などが集中する盛り場が形成された。次に、前門大街沿いに、零細な手工業者が店を出して製品を売り出すなど、多くの定期市・定時市が開かれ、経済活動の拠点として発展した。とりわけ、前門地区は北京各商業地区の特徴を持ち商業地区となって繁栄した。

まとめ

以上、1900年以前北京を代表とする既存商業地区の形成要因と分布を概観した。これまでの考察から得られた北京の伝統的商業地区の特質を概括すると、主な特質は次の四つの要約できる。

- 1) 歴史的にみると北京の中心商業地区の配置は多核型の構造を持つことである。すなわち元、明、清代の商業地の立地形態は、北京の明快な中心軸をもつ左右対称の都市構造と絶対的な権力をもつ、巨大な皇城が都市の中央に置かれて、東西の交通が不便であったことが影響している。これらの敷地は国家の権力象徴である施設にすって占められている。
- 2) 近代以前の商業地区の分布は都市を貫く南北方向の幅員の広い、交通量の多い幹線道路沿いに置かれた。この道路沿いは、一部の官庁、宗教施設も置かれて、店舗はこうした直線的な道路に沿い並んだ。また、幹線道路に繋がる城門の近くに存在し、さらに北京の経済的な消費のため商品の集中する主要な供給地に存在していた。
- 3) 中心商業地区と共に人々が集まる定日市、定時市など仮設的な商業施設が重要な機能を発揮する商業地区が存在していたことであった。またこれら商業地区は常設的なものではなく、一時的に賑わって、とくに前門商業地区が盛り場としての性格を持つようになったのである。
- 4) これらの商業地区に位置する商業施設の成立は国による計画的に整備されたものではなく、仮設的かつ小規模な商業施設であって地区住民生活のニーズに応じて、自律的に形成されたと言える。

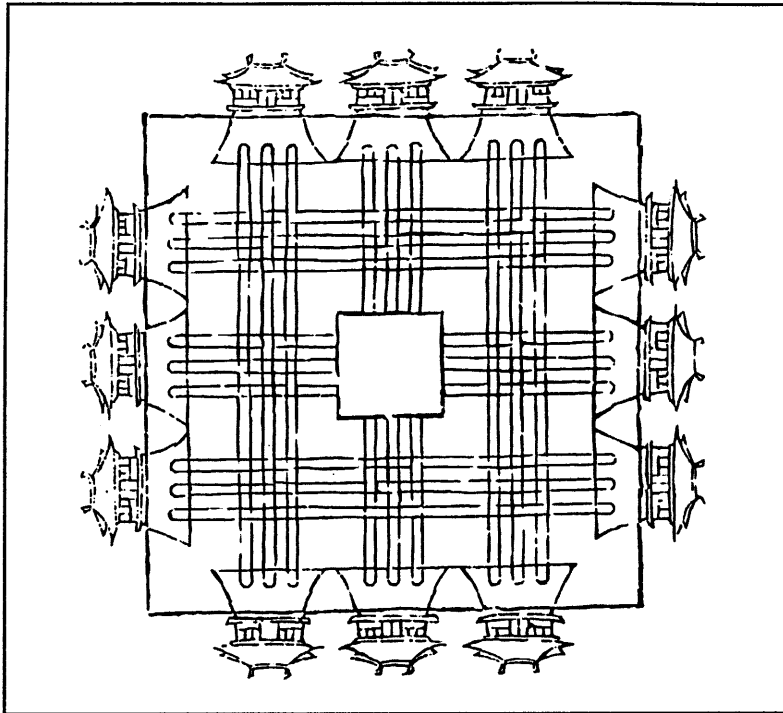


図2-1 周礼図による王城プラン (出典：『中国古代建築史』)

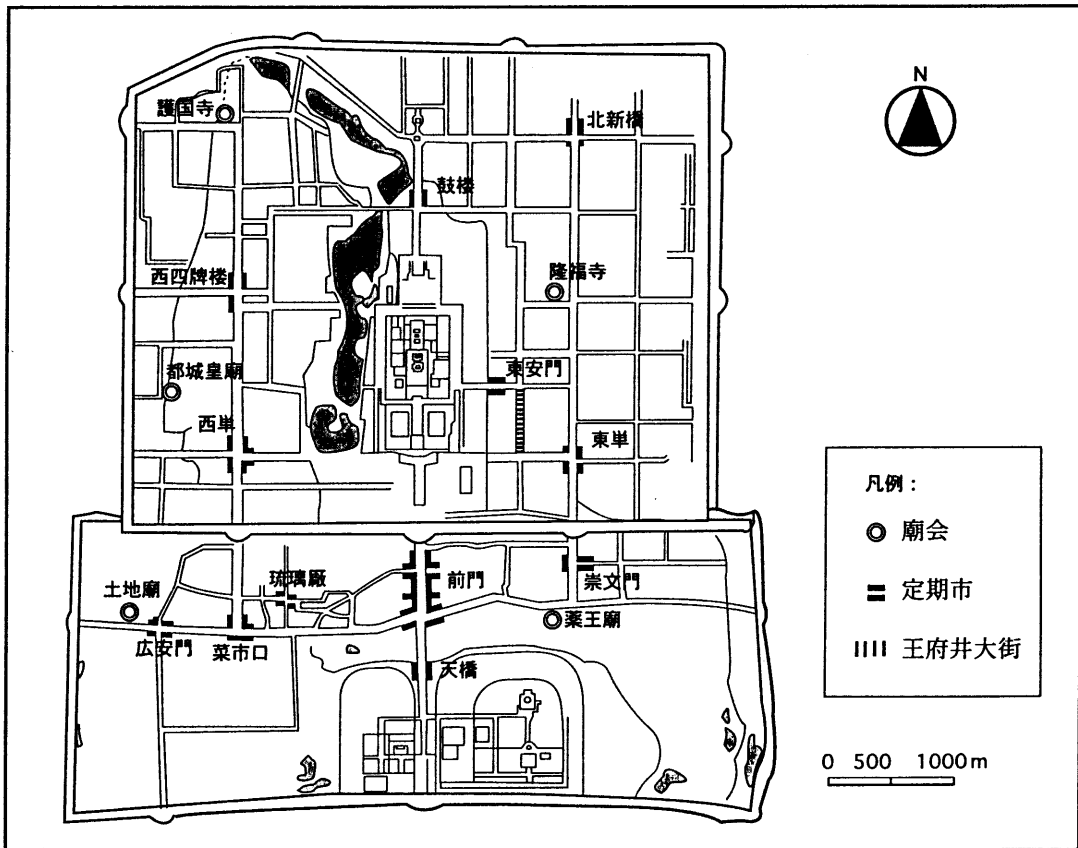


図2-2 近代以前北京の商業地分布図 (『北京城市歴史地理』より作成)

表(2-1) 明・清時代における定期市・廟会表(『清末北京志資料』より作成)

定期市		廟会		
市場名	場所	定期市名	期間	場所
銀錢市	前門大街西小胡同	南藥王廟	毎月10、16日	崇文門大街
珠寶市	前門大街西南街	南城皇廟	毎年7月15日	前門大街
玉器市	前門大街門坑胡同	東岳廟	毎月1、15日	齊化門
估衣市	前門東大街	土地廟	毎月3、13、23日	宣武門大街
皮衣市	前門大街猪市口	隆福寺	毎月10、19、29日	東四牌樓
米市	前門大街、東四地区	護国寺	毎月7、8、17、28日	西四牌樓
魚市	前門大街	臥仏寺	毎年5月1日～6日	広渠門
豚市	前門大街	白雲觀	毎年1月1日～20日	西便門
羊市	徳勝門大街	繡桃宮	毎年3月1日～3日	東便門
馬市	徳勝門大街	土地祠	毎年1月1日～18日	琉璃廠
曉市	崇文門大街	中頂	毎年6月1日	右安門
菓市	前門大街	南頂	毎年5月1日～15日	永定門
菜市	宣武門大街	北頂	毎年4月1日～15日	海澱藍淀廠
瓜市	前門大街珠市口	看丹	毎年4月28日	彰儀門大街
黒市	徳勝門大街	廠甸	毎年5月1日～18日	前門大街
補拆市	前門大街珠市口	黄寺	毎年1月23日～25日	徳勝門大街
雀儿市	宣武門大街、東四地区	黒寺	毎年1月23日～25日	徳勝門大街
花儿市	崇文門大街	善菓寺	毎年6月5日～6日	彰儀門大街
油酒羹市	崇文門大街	曹老公廟	毎年1月1日～15日	西直門内路
燈市	東単燈市口	都城皇廟	毎年5月1日～6日	宣武門大街

【注】

- (注1) 侯仁之著『北京城的起源与変遷』(北京燕山出版社 1995年12月)
- (注2) 朱祖希著『北京城一営国之最』(中国城市出版社 1990年2月)
- (注3) 一辺に三つの門。各門に三条の道、中央に位置する、全体の九分の一の宮城。これが『周礼』の示す王城の典型である。伊原弘著『中国人の都市と空間』(原書房 1993年10月15日)
- (注4) 前掲侯仁之著『北京城的起源与変遷』(北京燕山出版社 1995年12月)
- (注5) 張在元編『中国都市と建築の歴史・都市の史記』(鹿島出版社 1994年10月28日)
- (注6) 前掲、張在元編『中国都市と建築の歴史・都市の史記』(鹿島出版社 1994年10月28日)
- (注7) 中国建築史編集委員会編『中国建築の歴史』(株式会社平凡社 1981年10月15日)
- (注8) 近代以前の北京商業施設に関する文献資料は、数多く残されている。本章で参考した文献は『昔日北京大観』、『北京城市及其零售商業的空間布局』などである。
- (注9) 果鴻孝著『昔日北京大観』(中国建材工業出版社、1992年)
- (注10) 陣内秀信、朱自暄、高木雅彦編『北京一都市を読む』(鹿島出版社 1998年2月25日)
- (注11) 前掲、果鴻孝著『昔日北京大観』(中国建材工業出版社、1992年)
- (注12) 日比野丈夫著『中国歴史地理研究』(同朋舎出版社、1977年)
- (注13) 前掲、果鴻孝著『昔日北京大観』(中国建材工業出版社、1992年)
- (注14) 侯仁之編『北京城市歴史地理』(北京燕山出版社 2000年5月)
- (注15) 前掲、果鴻孝著『昔日北京大観』(中国建材工業出版社、1992年)
- (注16) 王永斌著『話説前門』(北京燕山出版社、1996年)
- (注17) 前掲、王永斌著『話説前門』(北京燕山出版社、1996年)